

*注) ニオ／本来は刈り取った稲穂やトウモロコシなどを野外に円錐形に積み上げたものの意。ここでは、それを模した人工給餌器（装置）を指している。これにより、タンチョウは給餌を受けながらも、人とは距離を置くことができる。



これからは、野生の鳥としてのタンチョウとヒトとの共生の道を見つけていくことが大切になる

このように、取り組むべき課題は多いですが、東アジアを代表するこの美しい鳥が野生と共生していく未来を目指す関係する国内外の個人・団体と協力して活動しています」

正な距離を保ちつつ、共生の道を見つけていくことの大切さを、伝えていかなくてはいけないと思っています。あくまでタンチョウには野生でいてもらいたいわけですから、ドバトやニワトリのようなタンチョウではいけませんし、ましてや庭にくるノラネコ感覚ではいけません。そのための教育・啓発活動をヒト向けに、またタンチョウ向けには新しい形の給餌手法を早急に確立する必要があります。実は、現状では冬の人工給餌なしでは個体群の維持を望めないのも事実です。そこで、私たちは生息地分散の一環で行っている研究プロジェクトのひとつとして、ヒトとの距離を置いた新しい給餌手法の確立にむけて実験的な給餌をしています。そこでは、既に複数羽のタンチョウの誘引に成功しており、今シーズンもボランティアの方々とニオ（*注）を設置しました。また、可能な限り野生のタンチョウとしてする環境を整えることが急務であると思います。生息可能な環境があればタンチョウは自然に分散をしていくはずですから。ただしその場合、タンチョウとヒトとの付き合い方が今と同じであれば、どんなに新しい生息地が増えたとしても、問題は解決しません。

アマミノクロウサギ・トラストへの ご協力報告

本誌2013年5月号でご紹介した、公益社団法人日本ナショナル・トラスト協会が実施する、絶滅危惧種アマミノクロウサギのすむ森を守り、貴重な自然を次世代に引き継ぐ活動への協力についてご報告します。

JALグループでは「JAL アマミノクロウサギの森」の取得をご支援したほか、JAL チャリティ・マイルには、358名のJALマイレージバンク（JMB）会員の皆さまより合計1,428,000マイルもの善意が寄せられ、「JMB みんなのアマクロの森」のサポートが実現しました。また、奄美大島便機内での告知活動や機内誌を通じてこの活動を知ったお客さまより、日本ナショナル・トラスト協会に寄付のお申し出をいただくなど、アマミノクロウサギやルリカケスのすむ貴重な森の保護に、多くのお客さまのご支援を得て、航空会社らしい形で一役買うことができました。皆さまのご協力、ありがとうございます。JALグループは、これからも日本の美しい自然を守り、その大切さを伝える活動を推進してまいります。



フォトコンテストを開催。 ご応募をお待ちしています

羽田⇌釧路線就航40周年にあたる今年、生物多様性の啓発活動のひとつとして、2回目となる「JAL タンチョウフォトコンテスト」を開催いたします。美しい日本の姿を未来へ繋ごうというみなさまの想いが込められたタンチョウの写真とメッセージをお寄せください。応募作の中から、JAL賞や本コンテスト協賛としてMISIA賞、ビックカメラ賞などを選出いたします。また、入選作はJALグループのウェブサイトで掲載や、ポスターなどの広告宣伝媒体に採用予定です。なお、お申し込み方法などの詳細情報は、下記ウェブサイトににてご案内しています。

私たちは、今回のコンテストの開催や、入賞・優秀作品を用いた各種広告宣伝活動などを通じて、タンチョウ保護の重要性を社会に訴えていくと共に、今後も生物多様性の保全に向けて、私たちができる「私たちにらしい」活動に取り組んでいきます。これから釧路は、厳しくも美しい季節を迎えます。この機会に釧路を訪れ、地元の方々が守り育むタンチョウの優雅な姿を通して、日本の美しい自然を体感してみませんか。



『JAL タンチョウフォトコンテスト』

www.jal.com/ja/happyeco/tancho2013/

明日の空へ

より良い社会を
繋げるために、
私たちができること。

JAL
CSR REPORT

vol.09

私たちが大切に考える4つの分野

日本と世界を結ぶ

安全・安心

次世代育成

環境



豊かな自然を守り、その大切さを伝えていくために… 『JAL タンチョウフォトコンテスト』を開催

今、ご搭乗いただいている飛行機の尾翼に描かれている JAL グループのシンボルは、大空を舞うタンチョウをモチーフとしています。

実はそこには、日本の美しい自然や動植物をずっと守っていききたいという私たちの想いも込められているのです。



豊かな自然や美しい日本の姿を 未来に繋いでいくために

「生物多様性」という言葉からは、地球上で人類とともに生きるすべての動植物の種や生態系の多様性を守ることの大切さが思い起こされます。私たちは、日々の航空機運航によって、環境に少なからず負荷を掛けています。だからこそ、JALグループとして生物多様性方針を定め、それに関わる活動を展開し、豊かな自然や美しい日本の姿を未来へ繋げたいという想いがあります。そこで、機体に動植物のイラストを描いた特別塗装機『JAL エコジェット・ネイチャー』により絶滅危惧種へのみなさまの関心を高めていただくお手伝いや、国の天然記念物・アマミノクロウサギのすむ奄美大島の森林保護活動への参加など、生物多様性を守ることを重要な環境課題のひとつと捉え、その啓発・保護活動に積極的に取り組んでいます。

ヒトとタンチョウとの 新たな共生に向けて

国の特別天然記念物であり「日本の美」の象徴ともいえるタンチョウ。実は、絶滅が危惧され、国内稀少野生動植物種にも指定されています。「果たして、その実態や保護活動の現状や課題は？」そんな私たちからの問いかけに対して、釧路市を拠点にタンチョウの調査・研究活動に取り組む「NPO法人タンチョウ保護研究グループ」の百瀬ゆりあさんより、レポートをお寄せいただきました。

「タンチョウは世界で2番目に数が少ないツルで、野生では3000羽に届きません。そのうち、北海道に約1500羽、ユーラシア大陸東部に約1300〜1400羽が生息しています。北海道のタンチョウは大きな渡りをしますが、大陸ではアムール川の本・支流沿いで繁殖し、朝鮮半島や中国まで1000〜2000キロメートルの距離を移動して越冬します。

大陸では気候変動による湿原環境の変化がタンチョウの繁殖に大きな影響を与え、繁殖地西端のアムール川最上流部では、乾燥化のためにここ数年繁殖が確認できていません。さらに繁殖地や越冬地における開発行為により、生息地が狭められてきています。

一方、北海道では絶滅寸前の状態から冬の給餌によってその数は増加し、生息域も広がっています。給餌場には、雪の上で練り上げられる『ツルの舞』などを目当てにたくさんのお客さんが世界中から訪れます。しかし、最近では人に慣れたことで、事故に遭う個体が増え、また牛の餌を求めて牛舎に入ったり畑を荒らすなど地元農業との間に摩擦が起きています。

私共はタンチョウとヒトとの両方が、お互いに適